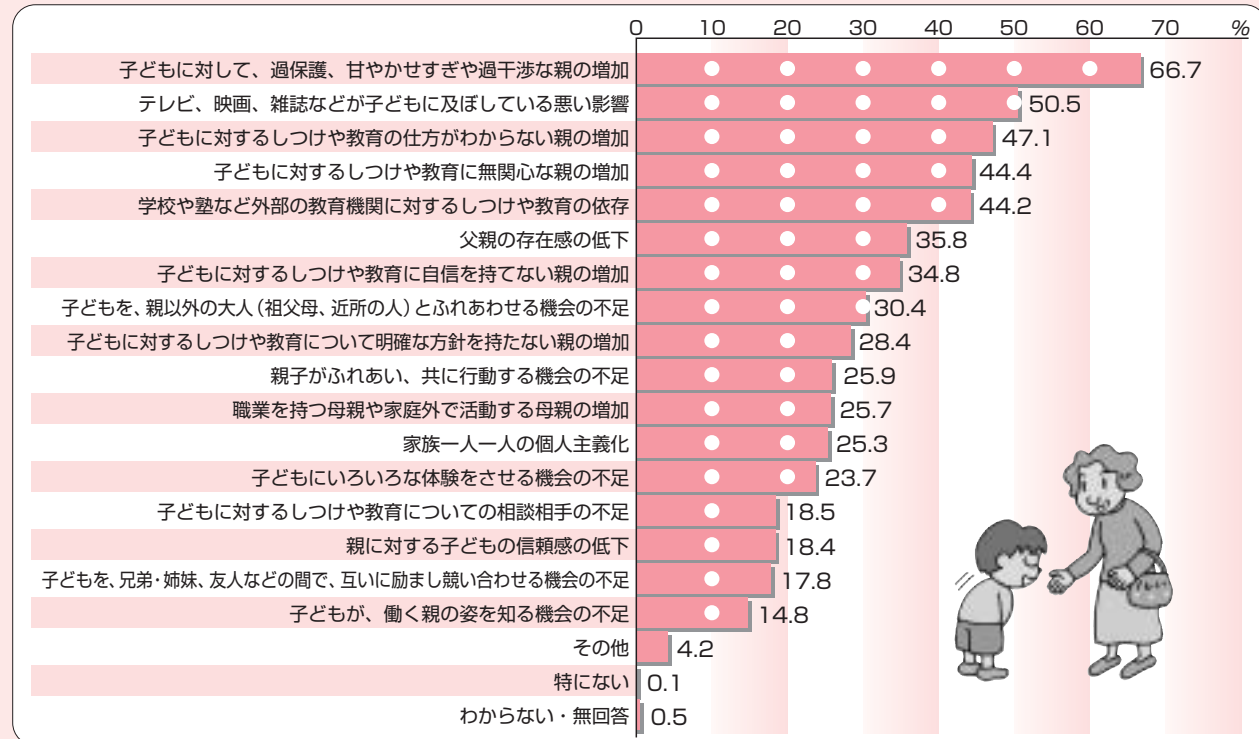


家庭の教育力低下の理由および家庭でのしつけや教育を充実させるために必要なこと

国立教育政策研究所「家庭教育研究会」が平成13年度に子どもを持つ親のうち、25歳から54歳までの男女（個人）12,000人を無作為に抽出して、家庭でのしつけの実態や家族・子育てに関する意識の傾向、特にそうしたことがらに関する現代の親たちの特徴に焦点をあてた調査（家庭の教育力再生に関する調査研究）をしている。

●家庭の教育力が低下している理由はなにか

少子化・核家族化などに伴い、近年は家庭の教育力の低下が指摘され、そのことが要因と考えられる現象が多く見られる。本調査によると「家庭の教育力が低下している理由（複数回答）」として下図のような傾向がみられた。



（国立教育政策研究所内家庭教育研究会「家庭教育力再生に関する調査研究結果の概要」より抜粋）

●家庭でのしつけや教育を充実させるための取り組みとして必要なことはなにか

この質問に対して、若い世代（25～34歳）の回答は「勤務時間の短縮や休暇の増加」、「身近なところで子どもが遊べる公園や遊び場などの設置」および「子どもが体験活動を行う機会の提供」が上位になっている。

これに対し、高年世代（45～54歳）は「家庭教育に関する親自身の学習機会の提供」「子どもが体験活動を行う機会の提供」および「親や地域の人々との協力による学習サークルや子育てネットワークの形成」が上位であり、しつけに関する親の自覚や方法を学ぶ機会の提供が重要としている。

	合計 (N)	勤務時間の短縮や休暇の増加	在宅勤務やフレックスタイム制導入	公園や遊び場の設置	子どもが遊べる公園や遊び場の設置	子どもが体験活動を行う機会の提供	親子がともに参加できるイベント等	親自身が体験活動を行う機会の提供	子どもが体験活動を行う機会の提供	学習サークルや子育てネットワークの形成	子どもを有言情報から守ること	その他	無回答
25～34歳	615	30.9	13.5	12.2	30.2	15.3	19.2	11.2	13.7	14.5	8.6	11.5	
35～44歳	1318	23.3	12.0	14.0	21.9	10.1	23.5	16.1	14.4	16.5	12.7	13.5	
45～54歳	1896	15.1	6.2	14.7	13.3	10.2	19.9	20.4	16.7	14.2	16.2	21.8	

（国立教育政策研究所内家庭教育研究会「家庭教育力再生に関する調査研究結果の概要」より抜粋）



Vol.1-04(通巻4号)
定価100円(本体95円)
送料80円

平成19年2月20日印刷 平成19年2月28日発行 編集人 山岸 忠雄
発行所/開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
03 (5684) 6121 [営業], 03 (5684) 6118 [販売] / 振替00130-8-75296
印刷所/バシフィック・ウイステリア 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-31-1 ニュービクトリアビル5F

開隆堂出版株式会社
〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03(5684)6111

北海道支社 〒060-0061 札幌市中央区南一条西6丁目11番地 札幌北ビル8階 ☎011-231-0403
東北支社 〒983-0043 仙台市宮城野区秋野町1-11-1秋野町Mビル2階 ☎022-782-8511
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市千種区星が丘元町14-4星ヶ丘プラザビル6階 ☎052-789-1741
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16 ☎06-6531-5782
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階 ☎092-733-0174

きょういく eye

きょういく アイ

— Information for Boards of Education —



巻頭言

「伝える」ことの難しさ

木場 弘子

母校の大学で教員養成課程の学生を対象に「教育と表現」という講座を受け持って今年で7年目になる。教員の仕事と私たちアナウンサーの仕事とは共通項が多いからだろう。

アナウンサーになりたてのころ、ニュース原稿を読むたびに先輩に注意された。句読点ごとに休みながら、単調に読む。自分としては、つかえず、間違えずにニュースを読んでいるつもりでも、上司には「自分だけ気持ちよく読んでいる」と指摘された。その読み方は、自分の読みやすさ重視で、対象者は頭がない。相手のことを考えれば、どんなに苦しくても息を継がずに、意味が伝わるような読み方をすべきなのだ。

原稿を読んで、「はい、仕事終わり」ではなく、相手に伝わって初めて仕事終わり。先生も授業をして終わりではなく、児童や生徒に理解してもらって初めて仕事をしたことになるのだろう。「伝える」と「伝わる」は一文字しか違わないが、大きく違うわけだ。

伝える際に気をつけることは沢山あるが、その中でも、最近気になるのが伝える情報の量だ。テレビ番組を見ていて、このことを強く感じる。こんな画面を見たことはないだろうか。ある人がインタビューに答えている。その画面には、同時に右上に「天気予報」あるいは、「コー



ナータイトル」、左上に「時間」や「番組サイトへのアクセス法」そして、右側縦にその人の「肩書きと名前」、下に横書きで会話を再現した「字幕」…。それらがかなり速いテンポで変わっていく。

とても全てを読めない。追いつけない。

これによって、私たち視聴者は消化できなかったというストレスに襲われる。情報が多すぎると、情報を得た、というプラスの感情より、見落とした、というマイナスの感情が残ってしまう。限られた時間でコメントを納めようとすると、当然、早口になり、何を言っているのかわからなくなる。このような時は、思い切って伝えるべき情報を絞るべきだ。ポイントを絞ってじっくり理解を得ることに努めたい。そして、対象者の表情を良く見ることが大切。

私自身、テレビの仕事だけだった頃は、無機質なカメラが相手に聞き手を強く意識したことはなかった。しかし、フリーとなって講演会やシンポジウムなど、目の前に人がいる仕事をするようになって、この大切さに気がついた。話すということはそこに、聞き手、対象者がいる。自分の話に対して、頷いたり、笑ったりしてくれる。すると、こちら相手もリアクションを待ってから、次に進もうとする。そこには、自然と間が生まれる。コミュニケーション能力が重視される昨今、まずはこんなところから気をつけてみてはいかがだろうか。

目次

「伝える」ことの難しさ 木場 弘子	1
冬季スポーツのトップアスリートの育成について 城後 豊	2,3
家庭の教育力低下の理由および家庭でのしつけや教育を充実させるために必要なこと	4

冬季スポーツのトップアスリートの育成について

城後 豊



1 子どもたちと冬季スポーツの課題

近年、冬のスポーツは、地域特性を活かした体験学習やイベントなど、町おこしの事業としても盛んである。また、アスリートたちも、北緯50度を境に19世紀末から欧米を中心に始まった国際大会や冬季オリンピック大会へ積極的に参加するようになった。これら冬のスポーツは、気候と文明・産業との結びつきの中で、地域の発展との関係が深く「雪(モノ)」や「体験(コト)」、そして「心(ヒト)」が一体感を成す北国ならではの特色あるスポーツ文化である。

冬のスポーツでは、アスリートたちも、とりわけ気候風土に敏感になり、五感も鋭くなる。また、幼少時代の冬のスポーツ体験が感性を豊かに育み、将来のオリンピック選手として夢を抱くことも珍しくない。事実、日本や世界の中で、活躍しているトップアスリートたちも、幼いころに地域の自然や雪や氷に触れた生活を好み、潤いのある季節感を肌で感じて育ってきた人たちが多く。しかし、北国では学校行事として実施されてきた「スキー遠足」などが激減している。その背景には、学校教育の煩雑さや学力低下問題、生徒指導上の問題、スキーに係る経済的な格差など、やむなく中止せざる得ない状況がある。その結果、大学生たちにカンジキを履かせ「いしかり原野の雪原散歩」に出かけたところで、最初に道を作ってくれた跡道をはみ出すことなく歩き、雪かきの済んだ楽な道を歩いてしまい、冒険心も、雪の感触も、広大な雪原に自分の足跡を残そうとしない。いずれも身体で感じる冬のスポーツの爽快感や知覚・運動体験が不足しているせいではなかろうか。これらのスポーツ事情から、スポーツ特有の心身の一体感を育む「憧憬と屈辱」及び「優越や劣等」の活動を通じて、競争心や、自分を発見し、仲間を理解していく機会を見失っている感がある。

2 冬季スポーツと教育の目

先日、寒風吹きすさぶ新千歳空港から羽田へ飛ん

● じょうご ゆたか ●
前北海道教育大学冬季スポーツ教育センター長。現在、北海道教育大学教授。日本スポーツ方法学会理事長。北海道体育学会会長。

だ。その機内にあった社内誌の見出し「今日も僕等は鳥になる—北海道ジャンプ少年団—(翼の王国第451号)」に目がとまった。表題には「生身の人間が空を飛ぶ—その感覚こそ原点だ」とあった。札幌市内にある大倉山シャンツェの麓にある「荒井山少年ジャンプ競技」の記事だった。取材者が、子どもたちに「憧れのジャンプ選手は？」と尋ねると「お父さん！」と返ってきたことを綴っていた。以前にも、平成4年(1998)の長野冬季オリンピックで活躍した里谷多英選手が大好きなお父さんの遺影を胸のポケットに入れて金メダルを取った。

これらの体験には、少年・少女たちの将来の夢をかなえ、道を切り開くコーチが、父の姿とその人生観に支えられていることを物語っている。いずれの“どさん子”スポーツアスリートたちも、かつて活躍した先輩メダリストたちや生活を共にしている家族・地域の人たちの熱心な指導・支援により、地域スポーツの担い手として全国に羽ばたき、将来のオリンピック選手を目指している。

一方、日本中を魅了したトリノオリンピックのカーリングの「チーム青森」がアスリートインタビュー「本橋麻里萬進(スカイワード1月号2007)」で紹介されていた。その記事では、トップアスリートの身体感覚の重要性を指摘していた。特に「氷上のチェス」といわれるカーリングは触感を中心に五感を駆使した情報戦の取組みである。

冬季スポーツは、自然を相手にするため刻々と変化する気温や風などの気候条件、そして選手たちの心理的变化が勝負を決する場合が多く、そこでは、就学期に体験した厳冬の自然と共生しながらスポーツに親しみ、育んだ成果が不可欠なのである。



3 地域スポーツの取組みとアスリート養成

雪国のスポーツの伝統や競技は、東北地方も盛んである。第57回日本体育学会弘前大会で地域スポーツの振興として「2006トリノ冬季オリンピックに賭けて」をテーマにシンポジウムを開催した。その課題として「地域が育むトップアスリート養成と課題—青森ジュニア選手の場合—」について交流した。パネリストの佐々木一成(2002ソルトレークシティーオリンピック日本ヘッドコーチ)と長浜一年(青森県立野辺地高等学校スキー部コーチ)の両氏が、地場産業や小中高の学校教育の一環(産学官の教育)から、アスリートたちの競技力向上の提案があった。特に、青森・平内町や野辺地地域の実態と、豊富な指導経験を交えた興味深いお話や示唆に富んだ内容について紹介する。

クロスカントリーの指導の中で「スリープって何？」と子どもたちに聞き、そして「進むためにどうするの？押せば前に進むでしょう」と止めワックスの大事さを教える。そして、子どもたち自らの手でワックスして、遠くへ滑る感覚を養う楽しさを感じさせる。また、初心者には「ウェアもスキーも頂きもの」で取組み、将来のアスリートたちには試合で抜かれたこと、転んだことを出し合い、笑い顔で対応する。スキー用具等については、経済的な支援・援助を先輩から譲り受けた“古いガタスキー・プレゼント式”で賄っている。いわゆる「ハングリーな環境」の中で、子どもたちと共に創意、工夫しながら取り組む活動である。さらに、「好きこそもの上手」を体験させる。親は競技会と一緒に出かけ、応援に気張り、参加の意識を互いに持たせる。また選手たちには大勢の人が見ているコースを走らせる。

一方、ジュニア・ユース期のトップアスリート養

成の指導について、次の内容を挙げた。

- ①地域環境特性を活かし、密着したクロスカントリーの指導；町の支援・協力を得た常設コースがあり、ナイター施設のあるコースが整備されている。
- ②野辺地は「スキー発祥の地」から発想；豪商(野村治三郎1904年)がスキーを取り寄せ、試乗した歴史と伝統があり、地域の指導理念と結びついている。
- ③高校では「スポーツ科学コース」の設置；併設のトレーニングセンターで世界のアスリートたちの映像を取り入れ、スキル・トレーニングに励んでいる。
- ④基本練習では「固体をしっかり」とつくる；ジュニア時代に身体(固体)をしっかりをつくり、固有のフォームを形成する。特に、バネの育成(キック力)の反復練習に挑ませる。
- ⑤練習量は発達と時間との調整から生み出す；毎日、1時間余りで、年間500時間のスケジュールから、選手一人一人が自覚を持って自主トレーニングのできる環境をつくる。
- ⑥各種の道具を使ったトレーニング；ローラ用具、スキーコースを使ったトレーニング、試合の目標を持たせコンプライアンス(Compliance)を大切にしている。
- ⑦スポーツ科学の導入；大学(北海道教育大学冬季スポーツ教育研究センター)との連携で体力測定(筋力無酸素パワー、最大酸素摂取量)や映像動作の分析などにより、練習プログラムを作成する。

シンポジウムでは、いずれも行政等の地域支援や大学等の教育研究機関との連携・協力によってトップアスリートを養成することが確かめられた。

今後、冬季スポーツのアスリートたちは、親子の心の交流、地域社会の生活環境、そして自然環境の中で人間的な教育活動を通して育まれることが望まれる。また、冬季スポーツはポジティブな人間味あふれる活動が重要であり、実際のフィールドを通して感性豊かな体験をすることにある。